

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第1集『長門昔ばなし』より

よとまり いけ
四泊の池

むかし肥後ひごの国（今の九州）に阿闍梨あじやり興こう円えんというえらい和尚さんが住んでいました。信仰が厚く徳の高い和尚さんでしたから「わたしも長生きして多くの人を救おう。」と、毎日考えていました。

いろいろ考えたすえ遠く離れた信州の里に善光寺さまのあることを知りおすがりすることにしました。

さっそく旅の身仕度みじたくを整え月参がつさんと言って毎月毎月お参りをするにしました。海を渡たりけわしい山の峠道をお念仏を唱えながらひと月も欠かすことなく和尚さんの善光寺参りは続けられました。

ある夏の暑い昼さがり、はるばる大門峠だいもんを越え大門の四泊にたどり着くことができず。和尚さんは肥後の国を出てから四日目に必ずここで泊まることにしていましたのでみんなが四泊よとまりと呼ぶようになりました。

今はあたり一面のたんぼになっていますが、その頃は青くすんだ美しい池があり、大きな松の樹が立っていました。

池のほとりにたどり着いた和尚さんはほっとひと息ついて、いつものように池の中をのぞきこみました。

いつもだと涼しくなるはずの和尚さんの体は急に火がついたように熱くなりどうすることもできません。

仕方なく一心に念仏を唱え続けました。するとふしぎなことが起こりました。水の面おもてに映しだされた和尚さんの姿はみるみるうちに蛇の姿に変わってしまいました。

そしてそのまま「ザブン」と、大きな音を立てて池の底に消えてしまいました。それからはこの池をみんなが四泊の池と呼ぶようになりました。

青く澄んだ池のほとりの松の樹には旅の笠が懸かけてあり、その笠には、

「此この国くには肥後ひごの阿闍梨あじやりの四泊よとまりや

其その名なも高たかき笠懸かさかけの松まつ」とあざやかに記しるされており、それからみんなが笠懸の松と呼ぶようになりました。